

少子社会における子育ての考察（第二報）

——教育の適時性と原体験の大切さについて——

河野光子

A Study on Child Raising in A Society with A Low Birth Rate (2)

by

Mitsuko KOUNO

1. 序

わが国の昨年（2005年）の合計特殊出生率は、1.25、前年よりさらに0.04ポイント低下し、依然として少子化の歯止めはかかっている。

指摘されている出生率低下の原因は様々で、（1）若者の経済的自立の困難（2）結婚してもメリットがないと考える若者の増加（3）結婚そのもののインセンティブの低下（4）核家族化による母親ひとりでの子育ての不安と荷の過重（5）夫の子育て不参加（6）地域社会の子育て力の低下（7）女性の高学歴化と働く女性の増加（8）子どもを産み育てる環境整備の遅れ（9）住宅事情（10）子育て費用の高額化（11）「家」の崩壊と家族関係の希薄化（12）避妊・墮胎の簡単化（13）女性の結婚年齢の上昇による出産可能期間の半減（14）出産の判断が女性に委ねられるようになった（15）乳幼児死亡率の低下（16）生き方・人生観の多様化（17）老後の生活不安（18）未来社会についての夢や希望の喪失等々、複雑多岐で、どれひとつとして、その解決はおろか、対策すら容易ではない。

ともあれ子育ては、社会存続の不可欠な営みであり、子どもにとっては待ったなしで、日々の「生活」の問題である。好むと好まざるとにかかわらず、少子社会を所与の条件として、より望ましい子育ての実践とその理論の構築が求められる所以である。

以上の問題意識から、拙稿第一報¹⁾では、H・ハーロウのアカゲザルの子育て実験を取り上げ、子どもの正常な成長、とりわけ健全な社会性の発達にとっての“群れ遊び”の大切さと、その大切な“群れ遊び”が、何故子どもの生活から失われたのか、その原因が子どもの遊び成立条件である「三間」（時間、空間、仲間）の変質と消滅にあるとの指摘をした。

社会性は、子どもの生きる力の土台、“群れ遊び”は、その社会性育ての“揺り籠”、そして社会性こそ人間関係能力として、少子社会における子育て上の最大の課題と考えられるから

である。

この観点から本報では、最初に“群れ遊び”を失った最近の幼児の育ちの異変について、藤原智美氏の報告²⁾を取り上げ、いま何がどう問題なのかを見ることを行う。

次に、第一報で紹介した和光保育園の「しつけ」から「群れ遊び」へと言う保育内容改革の今日的意義と成功の理由、および筑紫女学園短期大学付属幼稚園の「いのちと自然」学習のための“バケツ稲づくり”導入というユニークなカリキュラム改革の事例紹介とその意義を教育の適時性と原体験³⁾の重要性と言う視点から考察する。

2. 子どもの異変

「昨今、日本全国で幼稚園児たちに、ちょっとした異変が起きている」と藤原智美氏は、次のような報告をしている（以下、括弧内が報告要点⁴⁾）。

「ある教育研究所を取材した折に、目にした一枚の絵。それは、そこに通っている一人の幼児が描いた自画像。きれいなドレスを着て髪もアップにまとめ、いかにも漫画チックな絵。普通の子が描いた普通の絵に違いないのだが、ひどく気味の悪い印象をもった。その『人間』には、腕も脚もないのだ。何故、それらが『ない』のか？という質問に対する研究所教師の答え。『つい数年前に突然、五歳や六歳にもなるのに、腕のない人間を描く子が出てきた。それまでになかったこと、大変驚いたが、最近ではめずらしくない。』何故、そんな子が増えてきたのか？という重ねての質問の返答。『最近の子ども達が、昔ほど頻繁に手を使っていないからではないかと、最初はだれもが思っていたが、そうではなかった。ペイブレードのように、いつも手を使っている子や、跳び箱の得意な子もやはり腕を描き忘れる。』」

氏は絵を見た時の気味悪さを、先頃、佐世保の小学六年同級生殺害事件（かけつけた救急隊員でさえ PTSD⁵⁾にかかったと言うような血の海となった凄惨な現場に、加害者の子が15分間も居続けた）を聞いた時の気味悪さと共通したものを感じたと、次のように述べている。

「いま子ども達の中で、異変が起きている。他者を生きた肉体を持った存在としてとらえる回路のようなものがつくられていないのではないか。いや他者だけでなく、自分を含めて人間を血と肉と心を持った存在として見るまなざしが、どこか希薄なのではないか。」

異変はそれだけではない。報告によると「川を描かせれば、四角いプールのような絵を描く子や、三角形が描けない子どもも多いと言う。研究所の話では、川で泳いだことも、遊んだこともないと言った実体験のなさ。窓から見えるのは縦と横の直線のビルやアパートばかり。古い家並みの三角屋根が視野から消えたことにもよるのではないか。信じられないかもしれないが、斜めの線と言うのを認識できていない子もいるとのこと。」

こうした子どもたちの育ちの異変の原因は、子どもの育て方にも問題があるのではないかと、氏は次のように指摘する。

「四角い川を描いたわが子に驚きはしても、それで川に連れて行くのかと言うと、そうではない。ある親はビデオショップに走り、ドナウ川やライン川の映った観光ビデオを見せたと言う。川だけでなく、土や植物を直に見せる、さわらせる、遊ばせると言うことをやらない。理由はわざわざ足を運ぶ時間がないと言うだけでなく、そんなことをさせると『汚いから』だと言う。O-157騒動以来、親達は雑菌に対して過敏になっていて、それが子ども達の活動をせばめている。」

筆者が聞き取りをした元園長⁶⁾の話でも、子どもに砂遊びや土いじりをさせるのを“服が汚れる”とか“バイ菌が怖い”と言って嫌う母親が毎年いたと言う。子どもに“いただきます”と言う食事のしつけはしなくても、床に落とした食べ物を食べてはいけないと教える親は多い、とも。

体の異常もある。戦後の豊かさの中で、子どもたちの体位は、著しく向上したが、運動不足や食べ過ぎで肥満や糖尿病と言った生活習慣病の懸念、体力や運動能力の低下が指摘されているのは、周知の通りである。

藤原氏の報告にも体育指導員の話として、「最近、小学校低学年になっても、うまく走ることができない子どもが出てきている。そう言う子は、かかとを上げて床を蹴ると言うことができない。自由に動き回らせると、誰かとぶつかってしまう。相手の動きをみて、かわしたりすることが出来ない。これは、外遊びをしたことがないからだと考えられる。」

異常はまだある。「知っているモノを頭に思い浮かべ、それを描くと言うレッスンで、どうしてもそれができない子もいる。テレビとかゲーム遊びと言った視覚偏重生活で、モノをイメージする力が育っていないためか。そう言う子は、目をつぶると言う動作がよくできない。」

実物を知らず、体験を欠いた単なる言葉や映像だけによる受け身の知識のもろさ、恐ろしさである。子どもにとって生活であり、学習であった自然の中での群れ遊びを失った弊害が、ますます深まるテレビやゲームづけの生活の弊害と重なり、相乗的にこのような異変として現れてきたのではないかと考えられる。

同報告は、次のように述べている。「遊びは、子どもが夢中になってやるものだ。おそらくその懸命さが、思考力の発達を促すのだろう。今の子どもの遊びは、電子機器の受動的なものが主流だ。遊びは、より即物的に、生活はせかせかと落ち着きのなものになっている。減ったのは、お絵描きや積み木、あやとり、折り紙と言った室内遊戯だけではない。屋外の缶蹴り、馬跳び、馬乗り、ゴム遊び、鬼ごっこ……。それらを目にする機会はない。こうした遊びは、ぼくらが考えている以上に、子どもの成長にとって、大切なものだったらしい。」

よく知られるように、かつて子ども達は、野山を駆け、道路にあふれて毎日、日暮れまで

喜々として群れ遊び、よく食べよく眠り、すくすくと育ったものである。こうした子どもの遊びが奪われ、その生活が激変したのは、長い歴史から見ればわずか50年前、高度経済成長期以降にすぎない。豊かさと便利さと快適さ追求の流れの中で、衣食住はもちろん、今や遊びも子育てすらもサービス産業の支えによらなければ無理と言う時代になってしまった。

同報告は、結びで次のように述べている。「その外部化に対して経済的、時間的に適応できる親子はまだいい。多くの子どもは、相も変わらずテレビとゲームづけの毎日を過ごし、そのまま小学校に入学する。かつては、それをカバーする人間関係があった。例えば、祖父母が同居していた。あるいは近所には、子ども達だけのネットワークがあり、そこで遊びながら有形無形の生きる智慧を学び取っていた。それが無い時代、子どもたちは一体どうやって『育て』いくのだろうか。」

絵を描く能力とか、運動能力といった目に見える異変や異常はまだいい。問題は、その異変や異常の奥にひそむ目に見えない心の異変や育ちの歪みであろう。多様な文化的衣装にその本性がかくれてしまった、人間とは何かの解明の難しさにかかわる“内なる自然”⁷⁾の崩壊と言う問題である。

最近、子どもの間で器質的なADHD⁸⁾の数が増えていると言う。私達の脳は、自然の中の暮らしに適応して進化したために現代の過剰に刺激的な環境に対応しきれていないのではないとも言われている⁹⁾。それにしても子どもの体の変調、引き籠もり、鬱、ADHDの増加、無気力・無関心・無感動と言った風潮、いじめ、自殺、凶悪犯罪の低年齢化等々、心身・行動の異変は無気味である。

3. 保育内容改革成功の一事例

子ども達が、その昔なら毎日が盆と正月と言って良いような豊かで恵まれた環境に育ちながら、その育ちに様々な問題をかかえている。こう言う時代、保育園での保育では、一体何を大切にしたら良いのか、と言う深刻な反省から、それは家庭ではできなくなっているもの、すなわち“群れて遊ぶこと”と言う結論に達し、マンネリ化した「しつけ」の保育から“遊び”を大切にす保育へと、その保育内容の大転換を行った和光保育園。

この改革で、子ども達が目の輝きをとり戻し、それまで母親任せだった父親までが積極的に保育に参加し、子育てが楽しくなると言った成功をおさめることができたのは何故か。

結論から言えば、それは子どもの成長発達にとって何より大事な、失われていた“群れ遊び”の再発見と再評価、そしてその復活と育成のため、父親まで巻き込む保護者と園とのアイディアを出し合っの遊びを中心とする二人三脚の手づくり保育の実践にあると言ってよい。

わが子の健やかな成長を喜ばぬ親はいない。その喜びに支えられ、喜々として保育に参加す

る親の姿を見る子ども達は、仕合わせである。「子は、親の背を見て育つ」という諺があるが、この保育園の改革の成功は、改革の内容もさることながら、子どもと共に育つ「親育て」の成功にその鍵があったと言えるかも知れない。

この点に関して、聞き取りをした元園長も、こう言っていた。「子どものために良い保育をしようと思えば、保護者の協力が不可欠。そのためには、面倒でも十分に園の保育方針を保護者に理解させ、納得してもらうことと、よその子を含めて自分の子どもを知るためにも、保護者の保育への協力と参加の努力が大切になる。」

最近、身勝手にわからないことを言う保護者が結構いる由。例えば、自分の子が先に手を出してケンカになったこともよく知らずに、わが子の言い分だけを聞いて、うちの子がいじめにあっていると電話をかけてきたり、夫婦で抗議に来る保護者とか、ズルをしたために遊びからはずされたのに、だれだれは意地が悪いから、その子とは遊ばせないようにして欲しいとか。

手のかかる子が年々増えているとは、よく耳にするが、子は親の鏡と言うべきか、それ以上に手のかかる保護者も年々増えているとのこと。

ところで改革前の和光保育園も「しつけ」重視・設定保育中心・行事の多い普通の保育園であったと言う。家庭の教育力の低下で「しつけ」ができていない子どもが増えている時代に「しつけ」重視から「群れ遊び」中心と言うこの改革は、ある意味で時代逆行・経営的にも勇気のいる改革といえるだろう。

しかし、その心配は無用であった。子どもにとって、友達は偉大なる教師とされているように、群れ遊びを通して子ども達は、ズルをしない、約束を守る、だまって人の物を使わない、遊びのルールには従う等、様々な大事な「しつけ」を自分達でしたのである。

保護者が細かな「あれはいけない」「これはいけない」と言うようなしつけは、子どものやる気や自発性を削ぐのみで、むしろ無用である。一人っ子や過保護・過干渉・消極的で指示待ちの子が多い今の子には有害ですらある。挨拶をする、有り難うを言う、ことわりを忘れない等、大事なことをきちんと押さえておくこと、それを口で言うのではなく、園生活の中で、保護者自身が実行することである。“子どもは親の言う通りにはしないが、親のする通りにする”と言われているが、子どもはよく見ているものである。

また、「しつけ」には、一貫性が重要となるので、ポイントとなるものは数が少ない方がよい。例えば『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』の著者フルガムが挙げている幼稚園で学んだ「しつけ」の禁止事項は、「ずるをしないこと」「人をぶたないこと」「人のものに手を出さないこと」のわずか三つである¹⁰⁾。文化人類学者西江雅之氏の家庭での「しつけ」は、ただひとつ「あいさつ」だけだったと言う¹¹⁾。

ところで、幼い子ども達の「生活」の場である保育園が、遊びを奪われた子ども達にとって

どんな貴重な場であり、“群れ遊び”再生の場として、どんなに適当なところであるか。

- (イ) 朝から夕方まで、たっぷり時間がある。
- (ロ) 安全で伸び伸び活動できる施設・設備の備わった空間がある。
- (ハ) 沢山の遊び仲間がいる。

つまり、家庭や地域社会で失われてしまった子どもの“群れ遊び”成立条件の「三間」が全て揃っている。加えて保育園には、遊びの相手や支援ができる保育者がいる。

子どもは、遊びの天才と言われるが、今の子どもは遊ばない、遊べないと言う。例えば、折角、阿蘇の大平原に連れて行っても、持参したビニールシートを広げ、その上でトランプ遊びなどしかしないと行ったように。もちろん、子どもにその責任があるわけではない。子どもの遊びも一つの文化であり、文化は伝承されなければ失われてしまうからである。保育園や幼稚園が子どもの文化としての“群れ遊び”の再生と育成と言う大切な任務を負っていると同時に、それにふさわしい貴重な「場」である所以である。この役割は、残念ながら知育中心の小学校には期待できないものである。

ただし、今の保育園であれ、幼稚園であれ、保育者自身に伝統的遊びや野外での群れ遊びの知識や経験がほとんどないと言うことは十分留意しておく必要があるだろう。

将来、保育者となる学生において自然を知らない実状がみられる。元園長の話では、幼児教育科に入学して来た学生に鶏の絵を描かせると、四本脚の鶏を描く者が、かなり以前からいたと言う。毎年のように、これまでに「ひもじくてたまらない」と言った空腹体験の有無を尋ねても「有り」と答えた者は皆無の由。それどころか、幼児期の記憶をたずねても、ほとんど無いと言う学生が少なくないと言う。今の若い世代の幼児期の自然体験や生活体験が、いかに希薄で貧しいものであるか、象徴的である。

子どもの成長発達期の過保護・過干渉はもちろんであるが、便利すぎ、豊かすぎも果たして子どもにとって仕合わせなのか疑問である。

河合雅雄氏もこう言っている。「多くの子どもは小さな家で飼育され、学校では厳しい管理の下に画一的な教育で締め付けられている。そしてテレビやオーディオセット、ファミコンなどの電子器具に埋もれ、無機的な世界の中で、密室文化に耽っている。まるでクモの巣にかかった蝶が、もがきながら体液を吸い取られていくように、子ども達は過剰な情報の網目の中でもがきながら精神を衰弱させていく。」¹²⁾

確かに、まだ足を伸ばせば、子ども達の遊びの空間がないわけではない。しかし、そこへ行く途中の道路が危険なため、子どもにとってそれは無いに等しい。加えて最近、子どもを狙う犯罪も多発している。遊びの「三間」を奪われ、「安全」まで脅かされる子ども達は、どうすればよいのだろうか。

身近に公園や緑地があっても、禁止事項も多く、子どもにとっては余り魅力的な場ではな

い。また遊び相手もない。くり返しになるが、そう言う意味でも保育園での“群れ遊び”中心の保育は貴重である。ただし、その保育園の活動や遊びの「空間」について、余り経費をかけて整備する必要はないということである。それは、子どもが自然のままか、自然が残っている場を好むからである。その方が、変化があり、面白いし、遊びも発展する。飽きると言うことが無いだけでなく、小さな危険を経験することによって様々な生きるため、生活のための知識や知恵を学習するからである。

元園長からこのような話を聞いた。

「古い固定遊具が危険になったので、数百万円かけ、カラフルな屋根付きの滑り台を設置した。設置当初しばらくは、喜んで遊んでいたが、すぐに余り利用しなくなった。単調な固定遊具の遊びより、サッカーボールを蹴ったり、キックボードや一輪車などで体を動かす遊び方を好むだけでなく、砂場や裏庭の丸太小屋の中で、水遊びや泥遊びをして喜ぶのである。試みに、園庭の一角に大型ダンプで山の赤土を運んで、小さな土の山を造ってみた。園児達は、それこそ、その赤土の小さな山に群がって遊ぶのである。トンネル掘り、池づくり、お山の大将ごっこ、土団子作り、泥こね、泥塗り……。この赤土の小山は、数ヶ月もしないうちにほとんど平になってしまったと言う。子どもの内なる自然は、本能的に「自然」と共鳴するのかもしれない。」

昔から健康のため、自然の「気」を吸収するため、素足で朝露に濡れた土を踏めと言われていた。素足での外遊びをうんとさせると良いと思う。聞き取り園長の幼稚園では、素足で遊ばせていたと言う。素足では危険と言う保護者は多い。怪我をさせたら、あとが面倒と言うこともあって、ほとんどの園で素足遊びは行われていない。危険だから、その危険を体験させることによって安全教育にもなるのではないだろうか。小さなガラスの破片で足に切り傷をしたとする。ガラスの破片が危険だということを体で知ることになる。その経験からガラス片などの危ういものを園庭に持ち込まなくなるし、もし見つけたら、言われなくても拾って片付けるようになるだろう。先回りの過保護は、大人の論理である。ヨーロッパのある国では、子ども遊び場として建築物の釘もついた廃材をそのまま広場に置き、子ども達に自由に小屋をつくらせたり、工作させたりしている所があると言う。考えてみれば、かつて自然の中で群れ遊びをしていた子ども達は、ガキ大将の注意や友達の情報で小さな怪我はしながらも、立派に安全に遊んでいたものである。自然の中での群れ遊びが、子ども達にとってかけがえのない様々な学習の道場であると言われる所以である。

春日井晶子氏も次のように言っている。

「現代の文化や社会制度、教育、都市デザインなどあいまって、自然はいつの間にか私達の生活から切り離された遠い存在になってしまった。現在、世界のあちこちで、都市から失われた自然を取り戻そうとする動きが広がっている。どのような形でもいい、子ども達をもう一

度、自然の中で遊ばせることは、私たち大人の使命ではないだろうか¹³⁾

ところで、子育て上“遊び”重視の考えに対し、その対極をなすのは早期教育であろう。わが国では、一般に“勉強”は善、“遊び”は悪という観念がある。それは、よく母親が子どもに浴びせる「そんなに遊んでばかりいないで、勉強しなさい。」と言う言葉によくあらわれている。事実、早期教育はますます隆盛になっている。子どもの遊びの重要性を力説する以上、この早期教育に一応は触れておく必要があるだろう。

言うまでもなく早期教育とは、学齢前に幼児に行われる教育のことで、芸術、体育を初め、文字・計算・英語といった勉強までその種類は多い。その是非や評価は、内容はもちろんであるが、個人差や、やり方等、所与の条件等の違いがあって、一概には言えないが、一般的には次のように言われている。

早期教育の隆盛は、それが子どものために大切とか、教育上必要と言うより、「現代の子どもや母親の置かれた社会状況や心理状況をうまく捉えた企業戦略による子どもビジネスの成功によるもの。」¹⁴⁾

早期教育について、河合雅雄氏は次のように述べている。「昨今、ゼロ歳児教育とか、早期教育の重要性が強調されている。大切なことだが、その場合の教育とは、何であるかが問われねばならないだろう。教育と言うと知育に結びつく傾向が強い。子どもの無限の可能性と言う神話信仰に基づいて、知的教育が早期からなされる風潮には大きい問題がある。(中略) 知的刺激に対する脳内の反応機序は誰も見ることが出来ない。(中略) 幼児期には、積極的にさまざまなことを教える行為はむしろ控え、脳と身体の自己増殖を育てる培地を作ることが大切であろう。(中略) 人間の適応能力がどのようなものか、ほとんど解明されていない。その問題の解明が進むまでは、幼児の発達に人為的な介入が過度になされることは、極力避けるべきであろう。」¹⁵⁾

榎本博明氏も、行き過ぎた早期教育は禁物と次のように述べている。

「過剰なストレスや不自然な生活による心の病理が取り沙汰されても、勉強への意欲が高まっているなどと言う話は聞きません。その影響は、勉強への意欲にとどまりません。受け身の学習が長く続くことによる自発性の欠如、人と関わる体験を犠牲にして詰め込んできたことによる人間関係能力の欠如、ひいては生きる力の欠如が問題視されるようになってきました。(中略) 重要なことは、本人が大きくなった時、やりたいことを力強くやっていけるように、意欲的な姿勢を育てることです。」¹⁶⁾

問題視されるようになったと言う人間関係能力に関して榎本氏は、大要を次のように述べている。

「問題行動の多くは、人と関わる体験が少ないから起きる。友達とつきあい、大勢の仲間と遊ぶことで、人間関係を学ぶことが大切。子どもの人間関係は、乳児期から幼児期までは、親

子関係がその中心を占めているが、児童期になると友達関係の持つ比重が急速に増す。遊びを中心として子ども同士のネットワーク上で、いかに居心地のよい場所を確保するかが重大な課題となる。うまく確保できれば、毎日を楽しく過ごすことができ、自信もつく。この友達関係が人間関係能力を育てる上で重要なのは、保護が中心の親子関係と異なり、原則として対等でギブ・アンド・テイクの法則が支配する結構やっかいな関わりであるということにある。こうした関わりに適応していく過程の中で、子ども達は自己中心から抜け出し、共感能力や他人との距離のとり方や妥協の仕方、他者への配慮や思いやりといった社会的ルールや対人的技能を学んでいく。つまり人との関わりを通して“自分”が形づくられる。¹⁷⁾

少子化で過保護や甘やかし、その一方で過期待や過干渉といった今の子ども達にとって、子ども同士の群れ遊びの復活と育成がどんなに重要な課題か、友達関係をつくる手助けこそが、親や保育者の喫緊の仕事とあってよい。あえて重要かつ不可欠な早期教育があるとするならば、学力などとは異なり、あとからではその取り返しが極めて困難と言われる対人関係能力の基礎づくりこそが、それであろう。保育現場における“群れ遊び”中心、遊び重視の保育が求められる所以である。

4. 「自然といのち」学習カリキュラムの一例

「切れてしまった子どもたちと自然との関係を修繕するのは、この上ない難事であるか、あるいは不可能なことにさえ思える。しかし、この趨勢の向きは変えられるのだと、少なくともその速度を緩めることができるという信念を手放してはならない¹⁸⁾」とループは述べているが、都心にある幼稚園であるにもかかわらず、その難事をユニークな「バケツ稲づくり」の導入と言うカリキュラムの改革で、見事に克服した筑紫女学園短期大学付属幼稚園の事例を取り上げる。稲づくり自体も結構むずかしいこともあって「バケツ稲づくり」を保育内容として導入しているのは幼稚園では珍しい。しかも、明確なねらいを持った年間を通じてのコア（核）となるカリキュラムとしての導入なので、最初にどういう取り組みなのかを公開保育の資料¹⁹⁾を基にやや詳しくみることにする。

〔バケツ稲づくり〕

年長クラスのカリキュラム。その活動は、日常保育の一環としてこの園の“自然といのち”学習と言う三年間の背骨になる保育の仕上げとして通年に亘る取り組み。

（1）稲づくりの行程

5月

〈たねもみ選び〉 たねもみを塩水に入れ、底に沈んだもみを選ぶ。実入りの良くないたねもみ

は軽いので浮かぶ。

〈たねもみの発芽〉選んだたねもみを10粒ほど各自の浅い器に入れ、もみが少しつかう程度の水に浸し、黒いビニールの覆いをかけて、発芽させる。発芽するまで、器の水は毎日水かえをする。

〈土の用意〉昨年稲を育てたバケツの土に新しい土を加え、肥料を入れてよく混ぜ合わせる。小石やゴミがあれば取り除く。

〈ミニ田んぼ作り〉用意した土を各自、自分が稲を育てるバケツにこぼれない程度、一杯に入れ、水を注いでミニ田んぼを作る。水は土の表面を浅く覆う位たっぷり加える。

6月

〈田植え〉発芽した小さな稲の苗を各自、根や葉を痛めないように丁寧に、水を張った自分のバケツのミニ田んぼに浅く植える。田植えの済んだバケツは、園庭の隅の日当たりのよい所に並べる。

〈水やり〉毎日、登園して来たら、小さなバケツやジョウロで自分のバケツの稲に水やりをする。休んだ子の稲には、友達がやる。

〈観察記録〉気温の上昇と共に、稲の苗は日に日に大きくなる。稲の生育に驚いたり、嬉しくなった園児は、葉の数をかぞえたり、背丈を計ったり、稲の絵を描いたりして記録を始める。天候や気温の記録も行う。

〈分けつ〉大きくなった稲は、分けつを始める。分けつした稲で、バケツの田んぼは混雑し始める。

7月

〈間引き〉分けつして大きくなったバケツの稲は、2株程残してあとは間引きする。間引いた稲苗は、家に持ち帰り家で育てる。

〈中干し〉一度、水を抜いて干割れが少しできるくらい土を乾かし、数日間水やりを中止する。土の中に空気を入れて根の呼吸を助け、根をよく張らせる。中干しが済んだら又、毎日水やりをする。

8月

〈穂が出る〉夏休み中、園児は持ち帰った稲の世話をする。背丈近く大きく育った稲から穂が出はじめる。花が咲く。園のバケツ稲の世話は、日直の保育者が行う。園の稲も穂が出、花が咲く。

9月

〈もみの中に米ができる〉夏休み明け、登園してきて自分の稲も、みんなの稲も大きく育ち、一斉に穂が出ているのをみて大喜び。家の兄弟イネ（一緒に芽を出し、バケツで大きくなった間引き稲なので園児たちは、そう言う。）も穂が出、花が咲いたと報告する。「お母さんも初め

て稲の花を見たとき「喜んだ」、「大きくなった稲と一緒に写真を撮ってくれた」等、話にも花が咲く。

〈落水〉水を落とし、土を乾かす。穂が段々と黄色になり、下がってくる。

〈すずめよけ〉すずめに稲の穂の実を食べられる被害が出はじめる。わざと被害を見せてから、バケツ稲の上に防鳥網をかける。作業は園児と一緒にやる。

10月

〈稲刈り〉天気の良い日を選び、自分が育てた稲をハサミで根元から丁寧に刈り取る。収穫の楽しさを味わう。

〈乾燥〉刈り取った稲は、根元をしばり、穂を下にして竿にかけ、雨のかからぬ風通しの良い渡り廊下で乾燥させる（“はざ掛け”は、かつては秋の田の風物詩だった）。乾燥させるためにしばった稲には、藁利用のために、各自の名札をつけておく。

11月

〈脱穀〉よく乾燥した稲の穂から、もみを一粒一粒指で丁寧につまむ。一粒の種もみから沢山のもみが実ったことを実感させる（立派に実った稲は、一株でお茶碗一杯分の御飯になると言われている）。

〈もみすり〉始めは一粒一粒、指でもみがらを除き、米を取り出させる。その手間が大変なことを体験させた後、家から持参させていた播り鉢にもみを入れ、野球の軟式ボールで播って、もみがらを取り除き玄米にする。道具の便利さ、有り難さを理解させる。播ったもみからは、口で吹いて風の力で飛ばす。

〈精米〉玄米からぬかと胚芽を取り除き、白米にする。この作業は、園児達が玄米を瓶に入れ、細い丈夫な棒で気長に時間をかけて交代しながら搗いて行く。別に面白い作業ではないが、自分達が育てた米と言う思いがあるのか、一生懸命に搗く。この精米法は、戦後の食糧難時代に多くの人々がやった方法である。搗いた米は篩（ふるい）で糠を分け、新聞紙の上に広げて乾かす。

12月

〈新米パーティー〉年長組が一生懸命育て、精米までした新米を炊いてつくったおにぎりを、年少・年中・教職員も一緒に食べる（もちろん、米の量は足りないのだから、購入した米に混ぜて炊く。おにぎりづくりは、保護者達が行う）。おかずはタクアン2切れのみ。それでも「美味しい、美味しい」と、みんな大喜び。

〈親子納豆づくり〉自分で育てた稲の脱穀後の藁を使って、親子で納豆を作る。農薬を使っていないので、藁は安心して使える。納豆は健康に良い食品と言われるが、嫌いな子も結構いる。自分でつくらせることで、親しみを持たせると言う食育上の試みでもある。納豆づくりに使用した藁は捨てないで、園に持ち帰り、チャボやカモの巣の寝藁にしたり、焼いて灰にした

り、腐らせて翌年の稲づくりの土に混ぜる。命を大切に作る気持ちを育てるためである。

1月

〈餅つき大会〉新しい年を迎えて「今年の稲づくりも良くできますように」との願いを込めての餅つき。子ども達の稲づくりに感動した保護者の肝煎りで始まった行事。道具一式は保護者会寄贈による。

〈後片付け作業〉新しい稲育ての肥料とするため、残った稲の切株をほぐしたり、鳥の寝敷き藁や焼いた灰等を混ぜてバケツの土の片付け。盛った土の山には雨で流れないように、ビニールの覆いをかける。バケツはきれいに洗って、日に干して倉庫に保管。自分達もそうしてもらったように次の友達のために後片付けをきちんと行う。バケツに付けていた自分の名札もきれいに取り除く。

以上の「行程」をみて、この「バケツ稲づくり」がいかにか系統的で、総合的ねらいを持ったユニークなカリキュラムかが窺える。この取り組みは、導入2年目の時、園児達の観察記録の成果が平成7年度J A全中「バケツ稲づくりコンテスト」学校の部で「金賞」を受賞した。この稲づくりにおいて、どんなに園児達が一生懸命に取り組んだかが分かる。

「バケツ稲づくり」導入の効果とその影響に関する元園長の自己評価は以下の通り。

(2) 「バケツ稲づくり」導入の効果と影響

「バケツ稲づくり」は、年中時（年中クラスの園児）の種芋から苗を育てての芋づくりの経験を踏まえての導入で、ある程度の自信はあったが、初めてのことであり、不安がなかった訳ではない。それに、子ども達が喜んで取り組んでくれるかどうかの心配もあった。「バケツ稲づくり」は決してゲームのように面白い取り組みではない上、土や水を扱っての作業だからである。

しかし、その心配はいっぺんに吹き飛んだ。子ども達は、喜々として取り組んだ。「命は命より生まれ、命によって育てられる」と言われているが、子ども達は稲と言う植物の生長に驚きと命の共鳴のようなものを感じながら、生き生きと取り組んだ。自分の育てている稲を見、水やりをするのが楽しいのか、「朝起きがよくなった」「登園の身支度をいそいそとするようになった」等、何人もの保護者から嬉しい報告があった。発芽させたモミの芽に“つのが出てきた”。芽から緑の葉が伸び始めると“もう田植えしていいのと違うか”。田植えでは、小さな苗を痛めないように“そーっと、そーっと”と言って扱ったり、からんだ根に田植えが済んだら“もうケンカするなよ”と言ったり、葉の数が増えてくると“葉っぱの兄弟がどんどん増えて来た”とか、子ども達は稲に自分と同じ様な「命」を感じているらしい。自分のバケツから間引きして家で育てている稲にも“兄弟稲”と言っていたことにもそれがよく分かる。このよ

うに稲づくりを通しての「命」の体験と育てるのに手間と暇とがかかるところが教育的に良い。育てて出来た米が食べられると言うのも良い。それも主食と言うところが一層良い。生涯食べて行く、命の根としての稲を幼児期に育てたと言う原体験は極めて大きいと思われる。新米パーティ後、子どもが食べ物を粗末にしなくなり、好き嫌いの贅沢を余り言わなくなったと言う保護者がいた。もうすぐ小学一年生と言う自覚もあるとは思われるが、稲育てで、子ども達は大きく育ったと言って良い。幼児期と言うかけがえのない時機に稲づくりと言うかけがえのない命とのかかわりの原体験を持ったことの意味は、どんなに誇張しても誇張とはならないのではないだろうか。

この幼稚園でのバケツ稲づくりの成功の理由は、色々あると考えられるが、その一つとして遊びを中心とした保育を大切にしていることが挙げられると思う。もしも、普段から設定保育中心の保育であったとすれば、バケツ稲づくりは何とも面白くない設定保育の一つとして子ども達に受け取られたかもしれない。普段からしっかりと遊び込んでいるので、すんなりと受け入れられたのではないかと思われる。

加えてこの幼稚園の「バケツ稲づくり」導入の効果は、次の点で教育的意義が大きい。遊びを大切にする伸び伸び保育で有名な園であるが、年少・年中・年長の全園児が入り乱れての自由遊びの保育時間もある関係で、異年齢児同士でも結構、友達や顔見知りの関係があって、年長のお兄さんやお姉さんが一生懸命に育てているバケツ稲のことは、よく見て知っているし、話も聞いている。お兄さん、お姉さんの育てたお米のおにぎりも食べているので「自分も早く年長になって、稲を育ててみたい」と言う期待に小さな胸をふくらませ、園生活を送っているということであろう。

この園は、仏教関係の学園の付属幼稚園なので、入園以来、仏様に手を合わせること、食べ物に感謝すること、命は尊いものであるということ、仏教行事等を通して保育されてきている。一応の素地はあるので「自然といのち」の学習としての「バケツ稲づくり」は言わばその体験学習として、3年間の保育の背骨としての意義を持つものがあり、又、十分にその役割を果たすものとなっていると考えられる²⁰⁾。それにしても、これ程に意味のあるカリキュラム改革が、ほとんど経費をかけることなしに見事達成できたということは注目に値する。

この「バケツ稲づくり」導入のそもそもの契機となったのは、幼稚園で使っていた学園敷地のイモ畑が、学園の都合で駐車場となり、保育上、大きな困難が生じ、その困難克服のため真剣な対策研究の結果として到達したものであるということも留意すべきことであると思われる。

注

- 1) 河野光子「少子社会における子育ての考察（第一報）」『下関短期大学紀要』第24号、2005年3月 p.5 参照。
- 2) 「芥川賞作家が見た「幼稚園児の異変」」『プレジデント』19号、プレジデント社、2004年7月
- 3) 〈原体験〉「人の思想形成に大きな影響を及ぼす幼少時の体験」（新村出編『広辞苑』第3版、岩波書店、1983年、p.775）
- 4) 注2) pp.113～119 参照。
- 5) 〈PTSD〉心的外傷ストレス障害
- 6) 筑紫女学園短期大学付属幼稚園 元園長 河野愷
- 7) 〈内なる自然〉「進化史を通じて人類の存在の根本を形成している諸性質」（河合雅雄『子どもと自然』岩波書店、2005年、pp.2～44 参照。）
- 8) 〈ADHD〉注意欠陥・多動性障害
- 9) リチャード・ループ、春日井晶子訳『あなたの子どもには自然が足りない』早川書房、2006年、p.345 参照。
- 10) ロバート・フルガム、池央耿訳『新・人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』河出書房新社、2004年、pp.23～24 参照。
- 11) 斎藤茂太『父親不在シンドローム』読売新聞社、1987年、pp.160～161 参照。
- 12) 注7) p.4 参照。
- 13) 注9) pp.345～347 参照。
- 14) 榎本博明『子どもに生きる力を』創元社、1998年、p.26 参照。
- 15) 注7) pp.39～41 参照。
- 16) 注14) pp.36～37 参照。
- 17) 注14) pp.40～94 参照。
- 18) 注9) p.337 参照。
- 19) 筑紫女学園短期大学付属幼稚園「中央区研修会公開保育」資料、1998年11月5日
- 20) 幼児期は、“自然の分身”としての「自分」という人格の「核」の形成期である。この時期における“バケツ稲づくり”という“いのち”を育てることを通しての“自然”の体験は、想像する以上に重要な意味をもっているのではないかと考えている。（月刊『MOKU』2006年11月、MOKU 出版、pp.43～46 参照。）